

# 更級への旅

151



能因法師  
嵐吹く三室の  
山のもみぢ  
葉は  
龍田の川の  
にしきなりけり

さらしなや姨捨山に旅寝して  
こよひの月を昔見しかな

昔、さらしなの地で夜を明かした  
ことのある能因法師が、都かその辺  
りで月を見ておるときに、さらしな  
での観月体験を感慨深く思い出して  
詠んだ歌です。ひよっとしたら、菅

原孝標女はさらし  
なについて、能因  
法師から話を聞い  
て、イメージを膨  
らませたのではな  
いか？ 菅原孝標  
女にとっては自分  
のおじさんを先生  
と仰ぐ能因法師で  
すから、菅原孝標  
女と能因法師の二  
人の間になんらか  
の接点があっても

不思議ではないと思ひ、二人が出  
会った可能性がある場面がないか探  
しました。

ありました。天皇の側近である当  
時の最高権力者、藤原頼通の孫であ  
る祐子内親王の家で度々、行われた  
歌会です。内親王というのは天皇の  
娘のことです。菅原孝標女はこの内  
親王の世話をする女房として働いて  
おり、この歌会には能因法師が有力  
な歌人として参加しているのです。

に編まれた古今和歌集を初めに、室  
町時代までの約五百年間に、全部で  
二十一の勅撰和歌集が作られたので  
すが、その中で「さらしな・姨捨」  
が詠みこまれている歌を調べまし  
た。そこには和歌を作った経緯が添  
えられているものがあるのですが、  
「信濃に下りける…」などと、旅と  
の関連を強調した形で作った歌があ  
ります。例えば

「信濃国に下りける人のもとに遣  
わしける」とした上で  
月影はあかず見るともさらしなの  
山のふもとに長居すな君  
(紀貫之作、拾遺集)

さらに「越後より上りけるに姨捨  
山の麓に月あかりければ」とした  
上で

これやこの月みるたびに思ひやる  
姨捨山の麓なりけり  
(橋為仲作、後拾遺集)

紀貫之の歌は、信濃に任官する人  
に「信濃と言えはさらしな・姨捨の  
月が有名だが、そこの月が美し  
ざるからといって、ずっといては  
いけない。早く京の都に戻ってほ  
しい」という気持ちを詠んだもので  
しょう。橋為仲の歌は、新潟から  
の帰りに見たさらしな月の美しさを  
感慨深く思い出したものです。こん  
な風に勅撰和歌集で紹介される「さ  
らしな」です。訪ねたことがない人  
がさらしな・姨捨を盛り込んだ歌を  
作るためには、実際に訪ねた人にど  
んなところなのか聞き、自分なりに  
イメージを膨らませることが必要  
だったでしょう。

さらしな・姨捨には、自分の晩年  
をいやおうなく考えさせる響きがあ  
ります。そうやって、都の人々はさ  
らしな・姨捨の世界が身にしみ  
るようになり、「更級日記」も執筆さ  
れ、また和歌にも詠み込む人が増え  
伴って月の美しさが強調される地名  
になった可能性ががあります。そして  
最初に大きな影響を与えた和歌が古  
今和歌集収載の「わが心慰めかねつ  
更級や姨捨山に照る月を見て」だっ  
たのです(この和歌についてはシ  
リーズ30、60など参照)。

右の写真はかるたの「小倉百人一  
首」(任天堂)に描かれた能因法師  
とその歌。左上は天皇家に受け継が  
れてきた全勅撰和歌集を保管した  
蒔絵の箱です。その左上の写真は、  
菅原孝標女が詠んだ和歌「天のとを  
雲のながらもよそにみて昔の跡をこ  
ふる月かな」が選ばれた勅撰集の一  
つ「新勅撰集」(1235年)です。「勅  
撰和歌集入門」(有吉保著、勉誠出版)  
から複写させていただきました。

発行 二〇二一年十二月二十五日  
編集 さらしな堂  
(代表・大谷善邦)

〒三九九・〇八一三  
長野県千曲市大字若宮一八四・六  
(旧更級郡更級村)

## 千年前の平安京であった「さらしな問答」

当地の名を全国に知らしめた「更  
級日記」。作者である菅原孝標女が  
どのような経緯でこの日記を書き、  
タイトルを決めたのか。「源氏物語」  
が京の都(平安京)で話題になっ  
ていた千年前、「さらしな」がなぜ  
都の高貴な人たちの関心になっ  
ていたのかも合わせ、その理由につ  
いて、史料をもとに推測してみたい  
と思います。私の教えが廃れる  
時代が始まるという末法思想が影  
響していることはシリーズ  
47などで書きましたので、今号で  
は、その中で菅原孝標女が「さら  
しな」に関心を深めた理由に絞  
ります。

▽おじさんが先生  
調べていて「なるほど、そうか  
もしれない」と思ったのが、菅原  
孝標女(1008〜1059?)と  
能因法師との関係です。能因法師  
は(988〜1050?)は菅原  
孝標女より20歳年上ですが、ほぼ  
同時代を生きた人。中流階級の貴  
族の生まれでしたが、出家し、和  
歌の道を生涯、追究しました。

### 当地を訪れた更級日記作者の縁者

自分の足で東北地方をはじめ各地  
を歩き、地名が持つ想像換起力を世  
に紹介しました。現在の「歌枕」の  
地を示したさきがけで、江戸時代の  
俳人、松尾芭蕉に「奥の細道」の旅  
をさせる大きな影響を及ぼした人  
です。その能因法師は菅原孝標女のお  
じさん(母親の兄、藤原長能)を和  
歌の先生と仰ぐ人で、しかも、その  
能因法師は、当地にも旅をし、次の  
歌を作っているのです。



年を重ねて自分の晩年を案じてい  
た菅原孝標女ですから、さらしな・  
姨捨に旅をした能因法師が縁者であ  
るなら一層、「どんなところでした  
か」と尋ねたくなつたのではないで  
しょうか。能因も歌の先生の姪なの  
だからと、自分の観月体験やさらし  
な・姨捨の風景を語つたかもしれま  
せん。当時は今のようにならでもが  
手軽に旅ができる時代ではありませ  
ん。菅原孝標女も自らの足で当地を  
訪ねた形跡がありません。能因法師  
からの情報をもとに、さらしな・姨  
捨の世界をイメージを膨らませ、日  
記を書いたのではないのでしょうか。

能因法師が菅原孝標女のおじさん  
を先生と仰いだ理由は、従来の作風  
にとらわれない作風がおじさん(藤  
原長能)の歌にあったこともあるよ  
うです。当時の歌づくりは想像の世  
界を詠んだものが多かったそう  
です。自分の足で歩いた実感をたくさ  
んの和歌に詠んで松尾芭蕉を始め後  
の時代の詩人たちに影響を与えた能  
因法師ですから、普通とは違う作風  
の菅原孝標女のおじさんに魅力を感じ  
た可能性ががあります。

▽旅と和歌の力で

能因法師のことを調べ、さらしな・  
姨捨への関心が京の都で高まってい  
た理由についても想像を膨らませる  
ことができました。やはり「旅」と「和  
歌」の力が大きかったと思ひます。  
特に天皇の命令で編纂された勅撰和  
歌集です。最も権威のある和歌集で  
すから、そこに載っている歌は大き  
な話題になったはず。九〇五年